

2022 年 1 月 16 日（日）「原点回帰」

ガラテヤ 2:15-18

15 私たちは生まれながらのユダヤ人であり、異邦人のような罪人ではありません。16 しかし、人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、ただイエス・キリストの真実によるのだということを知って、私たちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の行いによってではなく、キリストの真実によって義としていただくためです。なぜなら、律法の行いによって、誰一人として義とされないからです。17 それでは、キリストにあつて義とされることを求めながら、私たち自身も罪人であるなら、キリストは罪に仕える者となるのでしょうか。決してそうではない。18 もし自分で打ち壊したものを再び建てるとすれば、私は自分が違反者であると証明することになります。

【序論】

クリスマス、年末、新年と、しばらくガラテヤ書から離れておりましたが、今日から再び講解説教に戻ります。聖書のいろんな箇所を巡ってからガラテヤ書に戻ってきたときに思い出す一つの言葉があります。それは「原点回帰」です。信仰の原点がここにある。自分が、教会が、いつも立ち返るべき場所はここである。それは、最もシンプルに言えば「恵みによって生きる」ということであり、本書全体が一貫して伝えようとしているメッセージです。しかし、書簡を読む面白さは、ただ「信仰義認」を「教理」として学ぶのではなく、著者パウロが直面していた生々しい経験に照らして学んでいけるということでしょう。本書には、パウロの感情が溢れ出ており、その息遣いがリアルに伝わってきます。説教者として、その感覚を会衆の皆様に感じ取っていただきながら、私たちが立つべき原点を金のように輝かせていくことができればと願っています。

【本論】

今日の箇所がどのような文脈上に置かれているかを確認しておきましょう。前回扱った 2:11-14 では、アンテオケ教会で勃発した一つの事件が取り上げられていました。アンテオケ教会にはユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者の両方が集っていましたが、その教会を訪れていたペテロは、当初は異邦人と一緒に食事をしていたのに、エルサレムから下ってきたユダヤ人キリスト者を前にしたとき、彼らを恐れて異邦人と一緒に食事をするのをやめてしまったというのです。古代において「食事」というのは、両者の

間に平和があることを意味しましたから原理的に両者の平和が損なわれたと言うことができるでしょう。悲しいことに、教会内でユダヤ人と異邦人が分断されるという事態が生じたのです。それを見ていたパウロは、この悪しき現実の本質に気づき、公然とペテロを非難しました。「主イエスの十字架によってユダヤ人と異邦人の間の『隔ての中垣』が取り去られたというのに、再びその壁を築き上げるとは何事ですか！」「両者ともにキリストの恵みによって罪赦されたはずなのに、あなたは再び割礼の有無によって差別を行なうのですか！」。私の言葉に直しましたが、パウロの意図するところはそういうことです。この事件が平和裡に収束したという報告がないところから見て、おそらくパウロはこの時点では理解を得ることができず、両者は決裂したと思われます。

それを受けての15節以下となりますが、新改訳では21節までが鉤括弧になっていて、ペテロに対するパウロのことばが続いているように解釈されています。しかし、聖書協会共同訳では14節までで括弧は閉じられ、15節以下は「恵みの原理」の説明へと移行している。原文には鉤括弧のようなものは付いていませんが、おそらく後者の読み方がふさわしいでしょう。

本論 1. 「異邦人のような罪人」の真意 (15 節)

私たちは生まれながらのユダヤ人であり、異邦人のような罪人ではありません。(2:15)
この節を読んだときに違和感を覚えるのは私だけではないでしょう。本書が異邦人教会に向けて書かれたものであるならば、パウロが言う「私たちユダヤ人は異邦人のような罪人ではない」という表現は差別と捉えられてもおかしくはありません。ましてや、会衆の面前でペテロに対して言ったとしたら、パウロは異邦人キリスト者たちからも敬遠される存在となったでしょう。私が最初の黙想の段階で引っかかったのは、この15節でした。

ここで読者は読み方に注意しなくてはなりません。16節以下の内容を見る限り、パウロが自分たちユダヤ人を特別視し異邦人を差別しているとは到底考えられません。彼は、異邦人を罪人と見なすユダヤ主義者の位置に立つてものを言っているのです。「あなたがたの考えるところでは、ユダヤ人は異邦人のような罪人ではないということであろうが」と言い換えてみると、理解しやすくなります。

現代のコミュニケーションにおいても気をつけるべきことですが、その人が全体としてどういう考え方をしているのかを見ないで、言説の一箇所だけを切り取って判断してしまうと、真意を読み誤ってしまうことがあります。この15節も、パウロの全体的な思想に照らして読まなくてはなりません。

本論 2. 人が義とされる道 (16 節)

しかし、人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、ただイエス・キリストの真実によるのだということを知って、私たちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の行いによってではなく、キリストの真実によって義としていただくためです。なぜなら、律法の行いによっては、誰一人として義とされないからです。 (2:16)

この箇所は本書の中心聖句であり、パウロが「神の恵み」をどう捉えていたかが最もよく表現されているところ、信仰の原点です。16 節の中だけで 3 回も「律法の行いによるのではなく」ということが繰り返されていますが、それだけパウロは、人間の業は救いを得るために何の益ももたらさないということを強調したいのでしょう。律法というのは神の法的基準であって、その法に基づいて人の生き方は評価されます。律法に適合すれば正しく、適わなければ罪と見なされる。そこには弁解の余地もありません。

この世の法に照らして考えてみましても、国民はその国の法的基準から外れていれば罪と見なされ、定められている罰則が課せられるでしょう。次元は違いますが、神が人間に求める生き方の基準は高く、聖く、罪人は根本的に的を外しているということです。的を狙って矢を射るが、どうしても外れてしまう。なぜなら、その心にはどこか不純物が混じっているからです。私たちが安泰に生きている裏側で、誰かが犠牲になっている可能性もあります。誰一人として自らを「罪なし」と宣することはできない。

パウロは、人間の義の業は救いを得るのに役に立たないことを何度でも語ります。では、人はどのようにして神の御前に義とされるか。それは、「イエス・キリストの真実による」というのです。ここで「真実」と訳されたことばは、原語では「πίστις」であり、一般的には「信仰」と訳されます。ただ、「イエス・キリストの信仰」と訳してしまうと理解しにくくなりますので、新改訳では「イエス・キリストを信じる信仰によって」と意識されました。いずれにせよ、ニュアンスとしては、主イエスの十字架を通して現された神の恵みに依り頼むことを意味します。神は無条件に罪人を受け入れてくださった。無条件となるには、代価が必要であった。神との正しい関係が構築されるためには、罪はすべて処理されなくてはならなかった。私たちの罪をすべて取り除けてくださったのは主イエスであった。主の死は犠牲となって、神の怒りをなだめた。それゆえに、如何なる罪人も、悔い改めて信じるならば、誰一人漏れることなく神に受け入れていただくことができる。そこには、ユダヤ人と異邦人の差別は存在しません。両者は同列に神の御前に立ち、同じ次元において救いにあずかるのです。それゆえに、両者は一緒に食事をするので、共に同じ神の恵みにあずかったことを証しするのです。

本論 3. 予想される反論封じ (17-18 節)

その意味で、ペテロが異邦人との食事を拒んだことは、この原理をなし崩しにすることを意味しました。順序は逆になりますが、18 節を見ましょう。

もし自分で打ち壊したものを再び建てるとすれば、私は自分が違反者であると証明することになります。(2:18)

「打ち壊したものを再び建てる」というフレーズには、いくつかの意味が含まれていると思われます。これまでの話の流れから理解できることとしては、せっかく異邦人との交わりを隔てていた壁が崩され共に食事をするようになるようになったのに、それをやめることによって再び障壁を築いてしまったと読むことができるでしょう。これは、私たちがごく身近なところに転がっている問題とも結びついてきます。人間世界の差別は、どんなに対処をしても、新たな芽が出てきます。ヘイトスピーチを法的に規制したとしても、それで根本的に差別がなくなるわけではありません。人の心には何かしらの差別的な視点が存在し続けます。これは、私たちが罪ある存在であることを証しする顕著な要素ですが、だからと言ってそのところに留まっていてよいものでもありません。雑草のように生えてくる差別の根っこは死ぬまで抜き続けなくてはならないのです。神の恵みを知った者は、そのような生き方へと導かれていく。なぜなら、神ご自身が私たち罪人を差別視しておられないからです。

「打ち壊したものを再び建てる」が意味するもう一つのことは、律法の行いを自分の救いの根拠にする生き方に舞い戻っていくことです。「救われるためにこうしなくてはならない」「こうでなければ神は自分を受け入れてくださらない」。この無限ループに再びはまり込み、抜け出すことができなくなる。その生き方には平安がなく、律法をしらみつぶしに守っても、それでも神に捨てられるかもしれないという焦燥感が伴います。しかし、パウロが教える福音はそうではありません。神は無条件に私たちを受け入れてくださったのだ。このことを信じて、イエス・キリストの御業、約束、真実に依り頼むだけでよい。福音とはホッとするもの。神が自分を愛してくださっている事実を知ることなのだ。これが、キリスト者が帰るべき原点であります。

それでは、キリストにあって義とされることを求めながら、私たち自身も罪人であるなら、キリストは罪に仕える者となるのでしょうか。決してそうではない。(2:17)

少々分かりにくい論理展開ではありますが、パウロは「信仰義認」という彼の福音理解を示したときに反対者が突っかかってくる可能性のある反論を想定して、あらかじめ口封じをしているのです。具体的な状況に照らしてご説明いたします。「(私たち) ユダヤ人が異邦人と食事をするという行為が罪と見なされるのであれば、その共同の食事を勧

めておられる主イエスは罪の助成者だということになるのか」とパウロは言っているのでしょう。主イエスご自身が共同の食事を認めておられるのだから、それが罪に定められることなどあり得ないと。

【結論】

私たちは毎月第一主日に聖餐式を執り行ないます。聖餐式は天国の饗宴を先取りしたものであり、共同の食事です。如何なる罪を犯した者も、主イエスにあって赦され、同じ食卓を共にしていることを見事に表現しています。司式をする者も、一時的に主イエスの代理として前に立ちますが、飲食する時には会衆と同じ立場に立っています。自分の罪を知っていることは幸いであり、その深みを知れば知るほど、赦された恵みの大きさを認識することになるでしょう。聖餐における心得として、私たちは人と自分を比べるのではなく、神の御前における自分に集中したいと思うのです。隣人と食卓を共にしながら、天に目を向ける。そういうことを私たちはしているのであります。

【祈り】

恵み深い天の父なる神様。聖なるあなたの御前には、すべての人が罪ある存在であります。民族的区別も、身分の違いも、男女の差別もありません。誰もが赦しを必要としています。主イエスの十字架の恵みを感謝いたします。私たちは主イエスにあって、あなたがご用意くださっている共同の食事にあずかることができるようになりました。これを通して、いつも神との平和、人との平和が自分の内にあることを思い起こさせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
聖なる基準をもって、すべての善悪を判断し給う、父なる神の愛、
ユダヤ人も異邦人も、高き者も低き者も、男も女も、共に罪の赦しの福音にあずからせ給う、主イエス・キリストの恵み、
共同の食事を通し、神と人との平和を実現させ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。